

## 巻頭言

## ユニバーサルデザインと規格

昭和 48 卒 東京大学 工学系研究科 電気系工学専攻  
先端電力エネルギー・環境技術教育研究センター (APET) 上席研究員 谷口 治 人



ユニバーサルデザインという言葉をご存知の方も多と思われる。Wikipediaによれば、「文化・言語・国籍や年齢・性別などの違い、障害の有無や能力差などを問わずに利用できることを目指した建築（設備）・製品・情報などの設計（デザイン）のこと」とされている。このことは、講演資料や論文執筆時には常に気を配るべきことであり、カラー版が白黒印刷になる場合には特に注意すべきである。カラー版であっても、積み上げ棒グラフで、境界の区別がつきにくい場合がママ見られる。

このカラー識別に関し、ある時、友人が持っていたユニバーサルデザインの資料を見ていたら、色覚異常検査図（石原式色覚検査）の例が載っていたので、確認したところ、一つだけ通常と異なっていることがわかった。気にすることのない極めて軽度の異常ということであった。小学校時代に検査を受けたことはあるが、特に問題は指摘されなかったので、インターネットで調べたところ、調べた範囲では正常であった。

だれにでも分かり易くという意味では、オリンピックやパラリンピックの競技を表すピクトグラム（図記号）も、その一例であろう。1964年の東京大会から始まったとのことだが、漫画の長い伝統のあるわが国発ということで誇っても良いことであろう。しかし、札幌開催に急遽場所が変更された、マラソンや競歩のピクトグラムは無く、一方、マラソンスイミングは発表されている。ピクトグラム表示する競技をどのような基準で決めているかは不明だが（自転車競技は5種類、馬術3種類に対し、陸上競技は1種類のみ）、開催場所も関係しているのであれば、今大会ではマラソンや競歩があつて然るべきであろう。なお、ピクトグラムは、大会毎に決められているが、やはり、2020年大会のが、最も分かり易いように思えるのは身びいきのせいもあるせいか。ただ、パラリンピックのピクトグラムは、競技になじみがほとんど無いせいか、若干分かりにくいのはやむを得ないのかもしれない。

また、ひと頃話題になった、案内用図記号としての温泉を表す記号は、意見募集の結果2019年7月にJISとして、従来の図記号とともに、ヨーロッパなどで使われている3人の半身が加わった図記号の両者のいずれを用いても良いこととなった。

電気技術に関することでは、三相交流の各相を表すのに、A-B-C、U-V-W、X-Y-Zであったり、記号ではほぼ○、△、□が使われるが、その順序や配色が、旧一般電気事業者（しばらく前までの、いわゆる電力会社）毎に異なって使われているようである。これらは、戦時中に発電・送電会社が日本発送電として強制的に統一されたにも関わらず、統一はされなかった。この事情は、多分、配電会社は統一されなかったことと、50Hzと60Hzの統一と同様、多額の費用が必要となったためであろう。また、定かではないが、発電機やタービンの回転方向が製造者によって異なっているとの話も聞いたことがある。ただ、相順など安全に直結した記号などは、安易に変更すべきではないだろう。

パソコンの外部接続端子にも、種々の規格が存在し、区別は中々難しい。ただ、記憶媒体やマウスとの接続では、USBが広く使われ、区別をほとんど意識しないで使えるようになっていることはすばら

しいことである。

キーボードの QWERTY 配列のように、一旦ロックインされてしまうと、その後からもっと合理的な配列が提案されても、変更するのは極めて困難である。わが国でも、親指シフトという入力方式があって、これを強く主張する人もいたようであるが、現在ではまったく見られなくなってしまった。

このように、一旦ロックインされてしまうと変更は困難であるので、規格の作成には注意が必要であり、常に更新できる可能性を残しておくべきであろう。また、ユニバーサルデザインの考えを基調としながらも、安全にかかわる事項には常に慎重であってほしいものである。さらに、地域に根差した歴史や文化などの多様性にも意を払い、温泉記号のように、併存できる場合は併存できるように考えていくことも重要であろう。ただし、いたずらに複雑化させず、屋上屋を重ねない配慮も必要である。

追記：以上は、本年正月に記したものだが、3月25日現在では新型コロナウイルスの影響でオリンピックの開催が1年程度延期されることが決定されている。早い終息を祈念しますが、読者の皆様にも感染には十分気をつけていただければと存じます。